

二〇二三年度

山梨英和大学

一般選抜B日程試験問題

国語

注意

- 一 問題用紙解答用紙の冊子は、試験開始の合図があるまで開けないで下さい。
- 二 試験開始直後に次のことを確かめ、解答用紙を冊子からはずして使用して下さい。
 - ア 問題用紙は表紙を除いて四枚です。ページの順番も確認して下さい。
 - イ 解答用紙は、一枚です。
- 三 受験番号は、解答用紙に記入して下さい。氏名は書いてはいけません。
- 四 答えは解答用紙に記入して下さい。
- 五 問題用紙は、試験終了後、各自持ち帰して下さい。

国語

次の問題文を読んで、後の問に答えなさい。

現代社会においては、個々人に対する集団の意味合いが大きく変化している。もはや、狩猟採集時代のような「A」の協力集団は存在していないし、部族意識でまとまる大規模な集団も鳴りを潜めてしまった感がある。一個人は、一生のあいだに集団をわたり歩くものであるし、家庭や学校、職場や地域、趣味のサークルなど、複数の集団に所属することもあたり前になった。

(a)、私たちの心理構造のキバン^①は昔のままである。所属集団で認められて承認欲求を満たし、所属集団に貢献して達成感を得ようとする。そこで、企業や組合などの諸団体は、所属メンバーの連帯感を刺激し、集団からの離脱を防ごうと、私たちの心理構造^Bを利用する。居心地の良い「居場所」を提供するのに加えて、団体の理念やスローガンを声高に掲げるのだ。ときには、団体のソング^②の危機をあおって結束を図ることさえある。危機のない段階で「将来の危機」をあおる行為は、フェイクとみなされても仕方がない。

スローガンでメンバーをまとめようとする団体は、封建的な雰囲気になりがちである。トップの意見を「C」し、下位の者も上を目ざし、自分の意見を主張しない傾向が生じやすい。まさしくサルの階層関係の復活である。たとえば、サッカーチームのユニフォームを進んで着る青年が、自分の学校の制服を着たがらない背景には、学校の封建的な雰囲気に対する反発が見てとれる。

一方で、現代社会における集団の求心力は急速に低下しつつある。もはや単なるスローガンでは、集団への忠誠心は維持できない。所属集団が変わりやすい現代では、個人としても伝統的な心理構造と折り合いをつける必要がある。周囲からの承認を受け達成感を感じながらも、それにコシユウ^③せず、変化する環境に合わせて新しい集団を求めていく姿勢が重視される。

(b)、複数の集団に所属するようになれば、いつでもどこでも変わらぬ「本当の自分」にこだわってはいられない。職場で細かいことに注意を払う経理社員が、週末に子どもたちの運動を指導するおらかなコーチになっていたら、どちらが「本当の自分」なのだろうか。おそらくどちらも「自分」なのである。

「本当の自分」とは、狩猟採集時代の協力集団における理想である。何もとり繕うことなく、ありのままの自分を承認してもらいたいという欲求の現れでもある。しかし現代では、そのような密な協力集団はなくなり、関係が限定された集団ばかりになってきた。そうした集団ではむしろ、集団ごとに異なった役割を果たすことが自己実現につながっている。自己を柔軟に演出できる人が現代の文明環境に適応しているのである。

(c)、職場と趣味のサークルでふるまいや主張が異なるのは当然である。SNSで両者の情報を開示していたら、矛盾が見られても当然なのである。それは、状況に応じて自分をスイッチできる「柔軟な自己」の開

示なのである（この柔軟さをシヨウレイするものが、平野啓一郎の「分人主義」である）。

こうした事態のなかで、かりに趣味のサークルでの発言がとりあげられ、職場で「じつはこんな人だった」などと吹聴されたならば、フェイク被害に相当するような「ぬれぎぬ」である。所属集団ごとに当然、発言にかかわる特別な背景がある。その文脈を外して、他の集団のメンバーが発言を批判する行為は、「本当の自分が存在するという発想にこだわったグコウだろう」^⑤

現代社会に生きる私たちは、タテマエを演じたり自分をスイッチしたりしながら、さまざまな集団に適応している。「本当の自分の存在」を前提にした「（I）あばき」が、柔軟な自己に伴う情報開示を消極的にするようでは、残念至極である。

戦後、日本の社会のあり方が、米国の社会と大きく違うことが強く認識され、比較研究が再三なされている。「日本はタテ社会である」とした中根千枝の議論や、「日本の安心社会は米国のような信頼社会に転換しなければならぬ」とした山岸俊男の議論が（I）である。それらの議論をふまえながら本書では、日本は狩猟採集時代の心理構造を色濃く残した「集団先行」であり、米国は現代社会の多集団所属状態により適応した「個人先行」であると論述しておきたい。

私は、小グループに分かれてのチームワークを主体にした授業を受け持っているが、新しいグループが編成されたときに、いつも気になる発言を耳にする。新メンバーが顔を合わせると、学生たちは自己紹介をするのだが、少なくとも学生がきまって「二年三組の〇〇です。サークルは入っていません」などと発言している。ここに集団先行現象がみられるのだ。

「三組」とはクラス番号であるが、実際のところクラスごとの授業はごく少数であり、自分がどのクラスに所属しているかを述べても他の学生には意味がない。それに所属しているサークルを述べるのであれば、いま取り組んでいる活動がわかって自己紹介になるが、サークルに所属していないと述べても役に立たない。（d）、サークルに所属していない不安を表明してしまっている。

こうした日本の学生の発言は、よく留学生から奇妙であると指摘されるが、思うに、日本の学生のアイデンティティが所属する集団によって確立されることを示している。さらに日本では、就職すると名刺を配って自己紹介しており、所属団体をアピールする傾向にあるが、それも集団先行の現れである。

集団先行の生活様式は、集団に所属することによって集団の利益を自分に分けてもらう戦略であり、狩猟採集時代の協力集団の構図を踏襲している。^⑥（e）、最初の自己紹介では集団に承認されたいという心理が起動し、自分は集団に害を及ぼすことのないジユウジュンな人であると表明したくなる。また集団に承認された後は名刺を配ることによって、その集団が形成してきた信頼を背負ってビジネスなどを有利に進めようとするのである。^⑦

一方、米国での自己紹介ならば、自分の活動や理想をソッセンして語り、賛同者を探すのが常である。いわゆる「ラウンドテーブルにつく」と言って、自分の能力や知識を披瀝（ひれき）^Lすることによって、相互協力できる関係を探し、へⅡへな集団をつくっていく個人先行なのである。

よく日本が「M」の集団主義、米国が自分勝手の個人主義とされる傾向があるが、それは誤解である。両国とも個人も集団も大事にするけれども、重視する順番が違うのである。その結果、集団先行の日本では、集団の中で誰が誰と折り合いが良いなどの、集団内での政治力学を見通す力が高まるが、見知らぬ人がどの程度信頼できるかを的確に見抜く力が弱くなっている（前述の山岸の指摘）。加えて、フェイクを見抜く力も弱い^⑨とルイスイできる。

それに日本では、集団の論理に由来するフェイクが横行しやすい。日本企業でたびたび生じている、品質検査データの捏造（ねつぞう）や食品の賞味期限の改竄（ざん）、日本政府の官僚が起こしている社会統計データの捏造や会議事録の改竄は、その最たる例である。集団先行の社会ではへⅢへなルールよりも、所属集団のルールが優先されやすい。ずさんなやり方であっても、「昔からこうやっているのだ」と言われると、それに異を唱えるのが心理的に難しくなるからだ。マフィアなどの暴力組織内で、法律よりも暴力行為が正義に感じられる現象とツウテイしている。^⑩

ビジネス環境などの変化が激しい現代社会で、集団先行と個人先行のどちらが有利かは自ずと明らかである。変化に対応した集団を「O」に組める個人先行のほうが有利なのである。それに集団先行では、過去に成功したやり方にコシウしてへⅣへになる傾向が顕著であり、変化への対応が遅れてしまう。ただ、長い年月にわたって地道な技術開発が必要なビジネスでは、集団先行の利点が出てくる。短期的な成果に惑わされることなく、団結して技術開発が続けられるからである。

近年、日本と米国の差異は、他の国々に関してもへⅤへに論じられることが判明した（北海道大学社会生態心理学ラボの研究）。人間関係の流動性が高い南北アメリカやオセアニアは米国と類似し、その流動性が低いアジアやアフリカは日本と類似している（ヨーロッパは両者が混在）。多様な人々が移住し続ける新大陸や、人の出入りが激しい商業地域などでは個人先行になり、人口密度が高く、農業などの体系的な協力が必要な産業がさかんで、自然災害が多くて団結が必要な地域で、集団先行になる傾向が見出された。

（石川幹人の文章による）

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字には読みをつけなさい。

問二 空欄（a）～（e）に当てはまる最も適当な接続語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア また イ むしろ ウ やはり エ ただ オ ところが
カ そして キ さらに ク たとえば ケ しかも コ だから

問三 空欄「A」「C」「M」「O」に当てはまる最も適切な四字熟語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- A ア 完全無欠 イ 終始一貫 ウ 一蓮托生 エ 一攫千金 オ 渾然一体
C ア 以心伝心 イ 不言実行 ウ 一意専心 エ 我田引水 オ 上意下達
M ア 滅私奉公 イ 杓子定規 ウ 旗色鮮明 エ 堅忍不拔 オ 大義名分
O ア 変幻自在 イ 公平無私 ウ 十人十色 エ 臨機応変 オ 問答無用

問四 傍線部Bの心理構造とはどういうものか、本文の内容を踏まえた上で答えなさい。

問五 傍線部Dとはどういうことか、本文の文脈を踏まえて答えなさい。

問六 空欄「I」「V」に当てはまる最も適切な語句を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 理論的 イ 実用的 ウ 代表的 エ 保守的 オ 革新的
カ 機動的 キ 公共的 ク 一般的 ケ 普遍的 コ 決定的

問七 傍線部E「とり繕う」、G「吹聴された」、J「残念至極」、L「披瀝（ひれき）する」、N「異を唱える」の意味をそれぞれ答えなさい。

問八 傍線部F・Hの指示語はそれぞれ何を指しているか、答えなさい。

問九 空欄I「（I）：」に当てはまる最も適切な語句は何か、本文中から抜き出して答えなさい。

問十 傍線部K「アイデンティティ」と同じ意味合いで使用されている語句は何か、本文中から二つ抜き出して答えなさい。

問十一 傍線部Pについて筆者の主張をしっかりと踏まえた上で、日本と米国の違いを、自分なりの具体例をあげて、自由に説明しなさい。